●2月選評　　小島なお

・めんたいこ（福岡県）

主語デカいほどよく燃える

「人類は」というときより、「私たちは」のときの主語のほうがたぶんデカい。主語が語られないままで文が成立する日本語の森は燃え続ける。

・スズキセーホン（千葉県）

あーあ、

クラムボン

美しい

オノマトペを

教えてください。

宮沢賢治の「やまなし」で、水中をきらめき、跳ね、死に、笑うクラムボン。言葉未然の言葉こそ、一瞬の泡であって、世界のすべてである。

・小藥　空（千葉県）

ワカサギ釣り。

まだ。

今。

氷にあいたちいさい穴。もう何時間も穴のほとりで待っている。待っている間はかろうじて続く「今」。ワカサギは誰の、何の使者として釣り上げられるのか。

・塚本　貴文（神奈川県）

スカートの谷に舞う
緋色の刺繍に
ぼくは桜をみた

スカートのプリーツの山と谷にもおしなべて春が来る。誰かの目に触れることで桜に意味が生れるように、刺繍はいま谷からはばたこうとしている。

・前江田太（北海道）

ここロのナかの君と話す
あのコロのナつの君に
コロンブスにナりたいと

ここロのナかの僕はこたえる。いつかのコロのナつかしい僕自身に。新大陸を見つけるために、いくつの夢をコロし、いくつの希望をコロさナいでいられたかを。

・いまはじまるの（兵庫県）

ずっと楽しいでいてね
台風の日も外に出ようよ

「楽しい」と口にした途端に、たのしい時間は終わってしまう。楽しいでいること。悲しいでいること。その不可能にいつだって挑んでいたい。

・????沢　美香（宮城県）

鈴の中に一本の糸寒桜

犍陀多ののぼった蜘蛛の糸や、この世と私を繋いでいた臍の緒。鈴の音のなかに垂れるのは祈りの糸だろう。寒桜はもっとも早く春を叶えてくれる花。

・松木　瓜（東京都）

針葉樹の下で

十リットルのため息を吐いた

昔のドラマにあった「一リットルの涙」よりもしんどそうな十リットルのため息。針葉樹の垂直のちからが、私をどうにか地上に押しとどめている。

・石川　美実（東京都）

あまつさえ一人ぼっちの僕なのに

君たち姉妹はひとつの車

姉妹という関係によって形成されるエンジンで駆動する車には窓が付いていない。一人ぼっちの僕を映すことなく、歳月を走り去ってしまう。

・火鯨研（熊本県）

駅前のゲロを跨いで私たち

これからずっと森で暮らすの

駅前のゲロは誰かの夜の痕跡。こんな露わな痕跡。みじめに失ってしまった私たちの野生はもう戻らないから、森へたましいを返してもいい。